せり

あかねさす　昼は田たびて
ぬばたまの　夜の暇に　採める芹子これ

葛城王
（20・四四五五）

（訳）（あかねさす）昼間は田を班ち与える班田使の仕事をして、夜の暇の時に摘んだセリですから、そのつもりでこれを召上って下さい。

（用字）芹子・世理
（和名）せり――せり科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）葉茎をゆでて食用とした

たく（かじのき）

水沫なす　いやしき命も　栲縄の
千尋にもがと　ねがひくらしつ

山上憶良
（5・九〇二）

（訳）水の泡のようにすぐ消えるはかない命ではあるが、タクでなった縄の長いように、いつまでも命長くと祈りくらしてきた。

（用字）栲・多久
（和名）かじのき――くわ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）繊維で布を作った

たけ

梅の花　散らまく惜しみ　吾が苑の
竹の林に　鶯鳴くも

阿氏奥島
（5・八二四）

（訳）　梅の花の散るのを惜しんで、うちのタケやぶに来てうぐいすが鳴いている。
（用字）竹・多気
（和名）まだけ――かほん科
（産地）栽植（原産・中国）
（用途）若芽を食用とした。材は種々の細工ものに使用

たちばな（みかん）

橘は　実さへ花さへ　その葉さへ
枝に霜降れど　いや常葉の樹

聖武天皇
（6・一〇〇九）

（訳）　タチバナは、実までも、花までも、葉までも、枝に霜が降っても、いよいよ栄えるめでたい木である。
（用字）橘・橘花・多知波奈・多知花
（和名）みかん・たちばな――みかん科
（産地）四国・九州
（用途）果実を食用とした

た　で（やなぎたで）

わが屋戸の　穂蓼古幹　採み生し
実になるまでに　君をし待たむ

（11・二七五九）

（訳）私の家の庭に生えている穂タデの古い幹を摘んで、新しいのを生やし、それが実を結ぶまでも、あなたを待っていよう。

（用字）蓼

（和名）たで・やなぎたで――たで科

（産地）本州・四国・九州

（用途）柿のしぶ抜きに使ったり、食用とした

たはみづら（ひるむしろ）

安波をろの　をろ田に生はる　多波美豆良
引かばぬるぬる　吾を言な絶え

（14・三五〇一）

（訳）安波峰の山田に生えているタワミズラを引張ると、ずるずる切れるように、私との話を絶やさないで頂戴。

（用字）多波美豆良

（和名）ひるむしろ――ひるむしろ科

（産地）北海道・本州・四国

（用途）食用・薬用とした。水田の大敵でもあった

たへ（こうぞ）

春過ぎて　夏来るらし　白細の
衣乾したり　天の香具山

持統天皇
（1・二八）

（訳）　春も去って夏が来たようだ。（白タエの）真白の衣を干してある天の香具山には。
（用字）細・妙・細布
（和名）こうぞ――くわ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）繊維で布を作った

たまかづら（つるでまり）

玉葛　花のみ咲きて　成らざるは
誰が恋ならめ　吾は恋ひ念ふを

巨勢郎女
（2・一〇二）

（訳）　玉葛のように、花だけは咲いて、実のならないのは、どなたの恋だろうか。私は恋い慕っているのに。
（用字）多麻可豆良・玉葛
（和名）ごとうづる――ゆきのした科
（産地）北海道・本州・四国・九州

たまばはき（こうやぼうき）

始春の　初子の今日の　玉箒
手に執るからに　ゆらぐ玉の緒

大伴家持
（20・四四三九）

（訳）初春の初子の日の今日、使うタマボウキを、手に持ったただけで玉の緒が鳴ってすがすがしいことである。
（用字）玉箒・玉掃・多麻婆波伎
（和名）こうやぼうき――きく科
（産地）本州・四国・九州
（用途）幹枝でほうきを作った

ち　さ（えごのき）

知左の花　咲ける盛に　愛しきよし
その妻の児と　朝よひに
笑みみ笑まずも　うち嘆き……

大伴家持
（18・四一〇六）

（訳）チサの花が咲く盛りに、いとしいその妻とお前が、朝夕に笑ったり、笑わなかったりする間も嘆き……
（用字）知左・治佐・萵苣
（和名）えごのき――えごのき科
（産地）本州・四国・九州
（用途）果皮を食べるとのどを刺激してえごい

ち　ち（いぬびわ）

ちちの実の　父の命　柞葉の　母の命
おほらかに　情尽して　念ふらむ
その子なれやも

大伴家持
（19・四一六四）

（訳）（チチの実の）父上や（ははそはの）母上が適当に心を使って思っておられるような、そんな子供で私たちはあるのだろうか。

（用字）知智・知々
（和名）いぬびわ――くわ科
（産地）栽植（原産・中国）
（用途）果実を食用とした

ち　ち（いちょう）

大王（正）の　任のまにまに　島守に
わが立ち来れば　柞葉の　母の命は　御裳の裾
つみ挙げかき撫で　ちちの実の
父の命は　栲綱の……

（20・四四〇八）

（訳）天皇の命により島守として赴任すると、（柞葉の）母上は着物の裾をつまみ上げ、私の頭を撫で（チチの実の）父は（栲綱の）……

（用字）知智・知々
（和名）いちょう――いちょう科
（産地）栽植（原産・中国）
（用途）種子を食用とした

つがのき（つが）

かき数ふ　二上山に　神さびて
立てる樛の木　幹も枝も
同じ常盤に　愛しきよし……

大伴家持
（17・四〇〇六）

（訳）（かきかぞふ）二上山に神々しく立っているツガの木は、幹も枝もいつまでも命長く枯れることがなく……。

（用字）樛木・都我能奇・都賀乃樹
（和名）つが――まつ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）建築材に使用された

つき（けやき）

疾く来ても　見てましものを　山城の
高き槻群　散りにけるかも

高市黒人
（3・二七七）

（訳）早く来て見ればよかったのに、山城の高いツキの林はもう黄葉が散ってしまったよ。

（用字）槻
（和名）けやき――にれ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）弓材とした。良質の木材とした

つきくさ（つゆくさ）

鴨頭草に　衣色どり　摺らめども
変ふ色と　いふが苦しさ

（7・一三三九）

（訳）　ツキクサで、色鮮かに衣（正）を染めたいと思うが、ツキクサ染めは色がさめ易いというのが気になる。

（用字）鴨頭草・月草

（和名）つゆくさ――つゆくさ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）花を染料とした

つきぬちのかつら（楓（もくせい））

黄葉する　時になるらし　月人の
かつらの枝の　色づく見れば

（10・二二〇二）

（訳）　地上の木々の色づく秋になったようである。月世界のカツラが色づいて月の光の増してきたのをみると。

（用字）日之内之楓・月人之楓・月人楓

（和名）かつら――かつら科
もくせい・ぎんもくせい――もくせい科

（産地）かつら―北海道・本州・四国・九州
もくせい―九州・或は栽植

つた（ていかかずら）

み吉野の　真木立つ山に……
延ふ蔦の　ゆきしわかれの
あまた惜しきものかも

（13・三二九一）

（訳）　長歌の一部に付き省略
（用字）蔦・角・都多・津田
（和名）ていかかずら――きょうちくとう科
（産地）本州・四国・九州

つげ

君なくば　なぞ身よそはむ　匣なる
黄楊の小梳も　とらむとも念はず

播磨(正)/麻の娘女

（9・一七七七）

（訳）　あなたがおいでなくては、どうして私の身を飾るようなことをしようか。櫛箱のツゲの小梳をとるような気もしない。
（用字）黄楊
（和名）つげ・ほんつげ――つげ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）櫛材や枕などに用いた

つぎね（ひとりしずか）

……つぎねふ　山城道を
他夫の馬より行くに……

（13・三三一四）

（訳）　長歌の一部につき省略
（用字）次嶺
（和名）ひとりしずか――ちゃらん科
（産地）北海道・本州・四国・九州

つちはり（めはじき）

吾が屋前に　生ふる土針　心ゆも
想はぬ人の　衣に摺らゆな

（7・一三三八）

（訳）　うちの庭に生えるツチハリ、そのツチハリを心から恋してもいない人の衣に摺りつけられないように御注意。
（用字）土針
（和名）めはじき・えんれいそう――ゆり科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）緑色の染料・薬用とした

つつじ（やまつつじ）

……竜田道の　丘辺の路に　丹つつじの
薫はむ時の　桜花　咲きなむ時に　山たづの
迎え参出む　君が来まさば

高橋蟲麿
（6・九七一）

（訳）竜田街道の丘のほとりに、赤いツツジが咲き映える時、又桜の咲き出る頃（山たづの）迎えに上ろう。あなたが帰っておいでになるならば。

（用字）茵・管目・管士・管仕・都追慈

（和名）やまつつじ――つつじ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

つづら（つづらふじ）

駿河の海　磯辺に生ふる　浜都豆良
汝を憑み　母に違ひぬ

（14・三三五九）

（訳）（駿河の海、磯辺に生うる浜ツヅラ）の如くあなたをたのみにして、母と仲たがいをしてしまった。

（用字）都豆良・黒葛

（和名）つづらふじ――つづらふじ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）薬用とした。茎は種々に用いた

つばき

巨勢山の　つらつら椿　つらつらに
見つつ思ばな　巨勢の春野を

坂門人足
（1・五四）

（訳）　冬の巨勢山のつやつやしているツバキをみながら、花ざかりの春の美しさを思い浮かべよう。

（用字）椿・都婆吉・都婆伎・椿・海石榴

（和名）やぶつばき・やまつばき――つばき科

（産地）本州・四国・九州

（用途）果実を食用とした

つばな（ちがや）

茅花抜く　浅茅が原の　つぼすみれ
今盛りなり　吾が恋ふらくは

田村家の毛の大嬢
（8・一四四九）

（訳）　ツバナ採りをするすすき原のつぼすみれは今花盛りであるが、そのように、私のあなたを思う心も、今盛りである。

（用字）茅草

（用字）つばな・ちがや――かほん科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）根茎を茅根といって薬用とした（利尿・吐血・止血薬）若いツバナは食べられる

つま（たぶのき）

磯の上の　都万麻を見れば　根を延へて
年深からし　神さびにけり

大伴家持
（19・四一五九）

（訳）　磯のほとりのツママを見ると根を長くのばして、いかにも年経ているようである。神々しく見える。

（用字）都万麻
（和名）たぶのき――くす科
（産地）本州・四国・九州
（用途）材質はやや硬く、多少くすの材に似ているが劣る

つみ（のぐわ）

このゆふべ　柘のさ枝の　流れ来ば
梁は打たずて　取らずかもあらむ

若宮年魚麻呂
（3・三八六）

（訳）　この夕方、仙女が化したというツミの枝が流れてきたならば、梁を打たないで、そのまま拾い上げないでいられるだろうか。

（用字）柘
（和名）のぐわ――くわ科
（産地）北海道・本州・四国・九州

つるばみ（くぬぎ）

くれなゐは　うつろふものぞ　橡の
なれにし衣に　なほしかめやも

大伴家持
（18・四一〇九）

（訳）はでな色のくれないは色があせやすいものである。ツルバミの汁で染めた地味で着馴れた衣服には及びもつかない。

（用字）橡・都流波美・櫟実
（和名）くぬぎ――ぶな科
（産地）本州・四国・九州
（用途）果実を黒色染料とした

つるばみ（とちのき）

橡の　衣は人皆　事無しと
いひし時より　着欲しく念ほゆ

（7・一三一一）

（訳）ツルバミで染めた衣ならば、多くの人が、気にもならないというのを聞いた時から、着てみたいと思った。

（用字）橡
（和名）とちのき――とちのき科
（産地）北海道・本州・四国
（用途）種子を食用、黒色染料とした

とが（つが）

滝の上の　御舟の山に　瑞枝さし
繁に生ひたる　栂の木の　いや継ぎ継ぎに……

笠金村
（6・九〇七）

（訳）吉野川の激流の流れるほとりの、御舟の山に、瑞々しい枝が、一ぱいに伸びているトガの木のように次から次へと……

（用字）栂
（和名）つが――まつ科
（産地）本州・四国・九州

ところづら（ところ）

……かき佩きの　小剣とり佩き
冬薯蕷葛　尋め行きければ

高橋蟲麿
（9・一八〇九）

（訳）……小剣を身につけ（トコロヅラ）のつるをたぐるように探し求めて行くと。

（用字）冬薯蕷葛・冬葽蕷都良
（和名）ところ――やまのいも科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）根茎を食用としたが味は苦い

なぎ（みずあおい）

醤酢に　蒜搗き合へて　鯛願ふ
吾になな見せそ　水葱の羹

長忌寸意吉麿
（16・三八二九）

（訳）　醤と酢に蒜をつきこんであえ物とし、鯛を求めている私に見せないでくれ。ナギのあつ物なんて。
（用字）奈伎・奈宜・水葱
（和名）こなぎ――みずあおい科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）葉をゆでて食用とした

なし

もみち葉の　にほひは繁し　然れども
妻梨の木を　手折り挿頭さむ

（10・二一八八）

（訳）　もみじの色は鮮やかであるが私は人目につかないナシの枝の方をとって頭に挿そう。
（用字）梨・成
（和名）やまなし――ばら科
（産地）本州・四国・九州
（用途）果実は食用とした

なつめ

玉掃　刈り来鎌麻呂
むろの樹と　棗が本を　かき掃かむため
長忌寸意吉麻呂
（16・三八三〇）

（訳）　玉箒を刈りとって来なさい鎌麻呂よ、むろの木とナツメの木の下を掃き清めるために。
（用字）棗
（和名）なつめ――くろうめもどき科
（産地）栽植（原産・アジア西部）
（用途）果実は食用、薬用とした（強壮薬）

なでしこ（かわらなでしこ）

野辺見れば　瞿麦の花　咲きにけり
わが待つ秋は　近づくらしも
（10・一九七二）

（訳）　野辺を見ると、ナデシコの花が咲きだした。私の好きな秋が近づいてきたようだ。
（用字）瞿麦・撫麦・奈棗之故・奈弖之故
（和名）かわらなでしこ――なでしこ科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）種子を薬用とした（水腫・麻疾の利尿薬）秋の七草の一つ

なら（みずなら　こなら）

御猟する　雁羽の小野の　櫟柴の
馴れは益さらず　恋こそまされ

（12・三〇四八）

（訳）（御猟する雁羽の小野のナラ柴の）ように、あなたに十分馴れもせず、恋しさのみまさることだろう。

（用字）櫟

（和名）みずなら・こなら・なら――ぶな科

（産地）北海道・本州・四国・九州

にこぐさ（はこねしだ）

足柄の　箱根の嶺ろの　和草の
花つ妻なれや　紐解かず寝む

（14・三三七〇）

（訳）足柄の箱根の山に生えているニコグサの花ではないが、そなたが花つ妻というのなら、がまんして紐も解かないで寝もしようものを。

（用字）和草・似児草・爾古具佐・爾故具佐

（和名）はこねしだ――うらぼし科

（産地）本州・四国・九州

（用途）葉柄と羽軸とを束ねて小箒にした

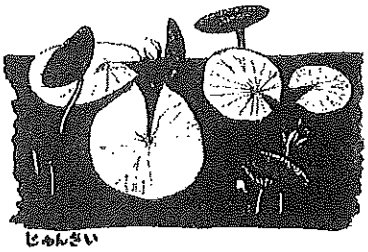
ぬなは（じゅんさい）

吾が情　ゆたにたゆたに　浮蓴
辺にも沖にも　依りかつましじ

（7・一三五二）

（訳）私の気持は沼に浮いているヌナワのように、ゆらゆらとしてきまらないので、この恋を進めるとも進めないとも決めかねる。

（用字）蓴
（和名）じゅんさい――はす科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）茎と草の背面に寒天様の粘質物があって、若葉と共に食用となった



ぬばたま（ひおうぎ）

ぬばたまの　夜さり来れば　まきむくの
川音高しも　嵐かも疾き

柿本人麿

（7・一一〇一）

（訳）（ヌバタマの）夜に入ると巻向川の川波の音がさわがしい。外は嵐が激しいのだろう。

（用字）烏玉・黒玉・奴波多麻・奴波多末
（和名）ひおうぎ（種子）――あやめ科
（産地）本州・四国・九州

ねつこぐさ（おきなぐさ）

芝付の　美宇良崎なる　根都古具佐
相見ずあらば　我恋ひめやも

（14・三五〇八）

（訳）（芝付の美宇良崎なるネツコグサのように）あなたにお逢いすることがなかったならばこんなに苦しむこともなかっただろうに。

（用字）根都古具佐・根都古草

（和名）おきなぐさ――きんぽうげ科

（産地）本州・四国・九州

（用途）根を乾して熱性痢病の薬とした

ねぶ（ねむのき）

昼は咲き　夜は恋ひ宿る　合歓木の花
君のみ見めや　戯奴さへに見よ

紀女郎

（8・一四六一）

（訳）昼は花開き、夜は慕いあって花を閉じるネブの花を君（私）だけみてよいものだろうか。お前さんも見たらどうかね。

（用字）合歓木・合歓樹

（和名）ねむのき・ねぶた――まめ科

（産地）本州・四国・九州

（特徴）小葉が夜間は閉じて睡眠する